

『賢女手習并新曆』 第十八稿 上演台本 二〇〇七年五月二十五日
パンフレット十一ページ〜十二ページ 第五場変更。この台本で上演します。

第五

瑠璃姫は、蝦夷に着きたり。実方と太刀丸を探さんと、うろろろとしているとき、

眷属これを見つけ、

眷属「これは眉目よき女かな。大王に捧げん」と瑠璃姫をつかまえ、

大王の前にさしだし

眷属「大王様、これなる女がふらふらと、歩いておりました」

と、つき出す。

瑠璃「そなたが安国か。わらわは、道清のむすめぞや」

安国きつと見て

おなじ

安国「因果、面白し。この二三ヶ年日本の女 を見ざる故、いとなつかしう思いしに、でかしたりでかしたり。やれ、眷属ども、これこそ日本の濡れ者という女ぞ。この上は、新月の夜、安国が妃になすべし。それまで離れ家に連れゆけい」「は〜」

いたはしや瑠璃姫は離れ家で、ただ実方の事のみ思いくづおれ、伏したもう。

誠につきぬ機縁きえんにや、実方と太刀丸はこも僧の姿にて、安国のすきをねらわんと様子を伺う、その時、瑠璃姫がとらわれ来たりし。

実方「わが妻瑠璃姫。こはそも夢か幻か。・・太刀丸、笛を吹け」

太刀丸「はい」

笛の音 胸にひしひしと、そぞろゆかしく思し召し、瑠璃姫立出で見給へば、

瑠璃「恋しゆかしの中将殿、弟太刀丸、こはそも誠か夢なるか」

と垣根を越え、はら・と走り寄り、

瑠璃「実方様、太刀丸すが太刀、姉上様なぜここに・・・」実方「瑠璃姫」

三人手と手に縋り付き、泣くより外の事ぞなき。母のこと、愛染明王のご加護のこと、つもる話しを語り合ひ、実方中将、仰せけるは、

実方「敵はいづくにかある。いざ斬入らん」

と奥に入り障子をそつと明けて見れば、宵の酒に酔よひ、前後も知らず臥ふしてあり。

実方「如何に安国、藤原の実方なるぞ」

(立ち回り)

さねかた きりつけたま
実方は、切付給う。太刀丸も「親の敵覚えたか」と、止めを刺す。
太刀「さあ、今こそ本望とげてあり」と奈落に沈め猛火は光を放つて失せ給ふ。

仏法不思議有難き、時刻移さず都よりお迎えの臥女、雲霞の如く馳せ来たりざんざめかいて御帰洛ある。千秋万歳、万歳万歳めでたしとも中々申すばかりはなかりけれ。めでたしとも中々申すばかりはなかりけれ。

(初めの女になって・・・)
実方様はそののち日本中を調べ、法王様の願い通り、新しい曆を作られました。

あの新曆は、日本を大きく変えました。
ちようど、明けの明星が満点の星をいっぺんに消してしまうほどの変わりようでした。

それから五十年^{まが}ゆかり
所縁のものはみな身罷りましたが、私は生きております。

まだまだ生きて、習わせて貰うことがあるよつで・・・。
ほんに、愛染さまの教えのとおり、なにが良うて、なにが悪いか・・・
分けられるものではございませんな。あ。

おお、いつの間にか、満点の星・・・。
みなさま、明けの明星までゆるりとお休みくださいませ。また次の世で・・・。